絲櫻春蝶奇縁

前編

貳

へ遠13
1579
2

門へ18
1579
2

絲櫻春蝶奇縁巻之二

東都　曲亭馬琴　編述

第二段の下

東京都立中央図書館

暫下曙明ハ。庭の筧ふ宿るもあべ。流る月を熟視て忽地嘆息ゐ。

うべ。良人ハ。と。死ぬ。意ふ稱ゐ。猛ふ物ゐ。ふ。賢べ。付ゐ。ふ。憂き

良ハ。ゐ。ぬ。ぬ。と。慰ゐ。ゐ。ゐ。笑ゐ。ゐ。異ゐ。仔細ハ。ゐ。ねど。ふ。流ゐ。ゐ。

思ひ。ゐ。て。て。ゐ。ゐ。絶ゐ。ゐ。ふ。投ー人を。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。共ゐ。ゐ。

その夜の月ゐ。今宵ふ似て。僕ゐ。べ。ゐ。の月ゐ。の日ゐ。七回ふ。當りて。ゐ。今ふ。ゐ。ゐ。

世の。実の節ふ。ゐ。べ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。誓ひ。ゐ。ゐ。ふ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

夫ふ。ゐ。ひ。ゐ。ゐ。ふ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

痛ゐ。

香華を手向。跡吊まで不ゐぐとも酒を喫肉をたらぐ。ゐ身と笑ひ狂むをよーと笑ひ
ゆひゐんと云つ死人ハ今更ふ身れ[illegible]ふ[illegible]ぞふ。と罪つくりと。正真ごろて密殺び。
東六ハ琴弾と且くハ粉ぞ。忽地ふ小藤を掘て呵ことうち笑ひ元ゐん身ごゐん所
すふ似ることもども。それハ女の愚癖ふを彼自物ハゐん身ゐ為ふ元来良人といはれゐ。
假初の嫖客ゐん淫酒の為ふ身を忘れ。遂を術なく備蓄を彼此より債られ苦
ゐ死きふいまも死人ゐ身を死狐ともめて。誘ひ出てものふゐ。さて世ハ
いつ逝げの駄賃とゆん毒を喰ゐて皿を惜む。喩ひよ仏ゐる事ゐ別ゐれば件の自殺ハ
ゐ身ゐ為ふ雖言ゐれゐ自滅するとも悼ふ足て。如此恩もなく徳もゐ彼ゐ為ふ魚肉
と断彼ゐ遠忌を吊ふゐゐハ浮世の耳ハ壁ふ著て。て云ての云ゐ人ゐゐ遂ふ夫婦ゐ
うんとゐゐゐんゐ子ども皆も乳を乞れて暑寒をゐぐきふ小耳に今ゐも面ぶせなる忘を
て由今の若ゐゐゐ死を祇寓ふゐゐゐハもけゐゐる祇ひとれゐ可惜奥を解ーゐ。今

一度をぐさあとて盃を引受つ。曙明ふ酌をとふし。ゐゐくと受て快げふ。
又呵ーと笑ふゐ一陣の風颯と吹く。東六ごゐふゐる盃をゐゐ蓋ー。
燈火一度ふ滅ーゐ。夫婦ごとふ何とゐゐ。毛骨坐ふ狭ごゐて又ゐゐふゐも
なゐゐゐる。楽竭て哀来る。秋情も殊更ふて雪井と渡る雁の掉ゐ。ゐゐ
寝屋ゐくゐくゐゐゐ繍寝ゐゐんとて東六ハ盃盤を納させ辞て卧房へ
入ゐたゐ。ゐゐ一旬だゐゐを送る程ふ。秋ゐたゐ餘波ふゐゐゐゐね。頃日ゐ
夜の長て人ゐゐゐゐいごゐ程ふ東六ゐ毎月ふ撃剣をゐゐる事ゐ。て夜ハ
快く初ゐ已ゐ。有一夕物ふ驚き覚て傷をゐんゐふ曙明ハ何れゐたけん衰ハ
裳脱の売とゐゐつ。彼厠へや登けんとて且くと且紙結ゐごふ。蒸襖ゐ
あゐゐたゐうて男女の密語声を。ゐゐハゐゐと消ゐて。頭を欺つ。ゐゐとゐん
とゐる程ふゐゐごゐも又睡ゐてそのゐちのゐるをゐゐ。ゐくの如くゐると。五六

夫物多相類而非也幽莠之幼也似禾黍牛之黄也似虎白骨疑象武夫類玉此皆似之而非者也

夕ふなびーうびこそろふふく疑ひ惑ひて。女房の挙動ふ意をとめく
つくくるふ叱るべきるもあるぬ。女児どもをいく罵りつれは対しくも。
ろづたてあのでくせうぶ。或いは物をうひ臭ふ空を瞻仰て門辺ふ立在
或いこそ浮るせ〜まそ。名紙呼ぶそも頻ふ意ぞ。人ふ問ふて動もされば。
辞を失ふと笑ろう。その為体。仇ある人ふこそろを惑ー。尓ちるどくうんえ
うび東六ふ〜〜疑念を起ー。通霄陽睡ー七。絆の虚実をあふぞやとそ。
雇傭をあて卧せども。とふかくふいぶさるくて。熟睡せね夜もるのうしうび。打
ゆ〜ろのいふべうもあ〜移ど。率尓ふ結肉ぐ。草を打て蛇ふ驚く。慮
るふ似ろう。とせんかくせんと肚裏ふて問答。ようやく一計を生つ。その
夜さう房の戸尻ふ豆一粒をすりて。結旦ふ起て竊ふ伴の豆を
うんぶびつがふ結る知ふあ〜で。敷居の溝二尺可後方ふあう。原来昨夕も

このとを開て。曙明ふ次の間ふ歩ろう。いくるのんびりれふ又いぶるるくて。
けんぶ。ろ〜ぬ〜ろ。ぶ。とろんび胸も塞るぞろう。娘ふ限りるみれど。元文
ふ見ぶ。両三遍試て強ふせんとぶあうと深念ー。その次の夜。房の戸
尻ふ豆を置て。朝いちんあ〜豆ふ成ふ豆ふ。ふるの。知ふあうされば昨夕も
出ぶろうけん。翌立の夜ふ又いうやるぶ。ふとそ。ぶうるるくあるれども。豆ふ
ふるの。知ふあうそ。開く出るるうふ。原来ぶ計策をそやあうと戸の
間閾をあるる後ふ豆ぶ又蕎のごと。戸尻ふ置やあんぶとんさふび術を
ゆんとそ。此度ふ一條の髪の毛をあうそ。彼戸の鈎頭を括留め。天明て竊ふこれを
ふ上ぶ。括る毛ふ断離ろう。こそふ至て東ふ。曙明ふ密夫あうくぶ。
熟睡する紙ふて。這奴ふ潔ふ臥房を脱出次の間ふて密夫と楽をとる
るうあと十二ろふ猜〜うれども。いまぶ彼密夫を雇るうと。怨ぶて。早ふび

人は笑ふてあらん。奸夫淫婦を押ならべて捕てこそといよ〳〵騒ぐ。次の日の暁昏に
曙明に對ひていふやう。今宵ハ門井子の甲乙と里神楽を觀にゆかんと誘て
いひつるをもおもへば。衣かづきして出かけゆる比ハ夜も深なん。よく鎖して
待かゝると実しやかにいひこしらへて遽しく衣裳を脱更小挑燈を引提つ。
宿所を出ぬれども。元来謀りし事なれバ。わづか二三町にして灯を吹滅して
立かへり。樹牆の間に躱て彼密夫が猜来るを今やおそしと待てをり。比ハ
十一月中浣なれバ月の氷もいと冴て往還も殊に稀にして内にハ妻が糸車の音
冬の経営もはかどる如く聞えて。初更二更と深ゆく程にやう〳〵臥房に
入りぬと覚しくて寂として音もせざりけり。子三刻の比及に潜びてきたる
もののあり。さハこそと思へども。耳く裡へ入まんとて跳る胸を鎮めて近く
なりまで透し見るに。その容貌定かにしらねども。日来この辺にて常に見なれ

人に似たり。その疑ひハ絶て猶よろづおもひあはして束六なれども眼前に密
夫が門より入るを見るにあらざれバ。さすがに抜かねて今をかけて引開んとこそすれ
外を背より走り出。奸賊等と呼びかけて刀を抜て砍んとすれバ。伴乃
をとこハ大に驚き。刃の下をくゞり潜りて飛が如くに逃去る。袖逃さじと追
慕るに。その速なる事飛鳥の如く。忽地に失ひければ。せんかたなくて呆然と
立在て引提たる刃とともに耳を欹て。つら〳〵と思ふやう。あやしきかな
早りていかゞひたりし。彼密夫を遂にしとめなバ。曙明に責問てその名をも聞きし。
宿所を出るとも。這奴いかで虚実と崇を得て家にとゞまるべき。遠く走りなく
耳くへ身を隠さんと疑ひけれバ。さらバ妻の罪のミを責てことを殺さんも労して
切るべし。元来わが妻へ人の通ふも媒妁もなく夫婦となりしものなれバ
よくわかれ又人の情婦を竊しものゝ彼のそしりハ家を捨て身を退るに

仇なるべし。七子ありとも婦に従ふ放を見ともむかしの人いひけるに況て
彼曙明ハ朝に源姓を結めて暮に平族と移わかる浮れ女の果なれバ。さりか
あくべき事にもあらじ。只何ゆゑ心なりて猛き奴を逐出し。いるそそれその艱苦
を受さし。みづからも心ひまなるに志て。ともかくと是思ひつ只今妾めに仕へで。
門の戸をそて。と鼓くゆゑ曙明ハ忽死おへて阿と悲つて遽しく指燭して門を開
らんとするに。遅かりしと寒けく其身もくさに足燎めて臥るへといひて遽て埋火を
掘起して爐に炭を継常にまさる真実しさやうに。かくいひけれども。猶なく
怒をおさへ。その夜ハおなじ房に臥て。つらつら思ふに決断し次の日早暁果て
後に妻をとひ両個の女児を召合つ。伎芸と形を改てさて曙明にいふやう。
曩にいひし汝が為に命を衰て窃にその必死を救ひ一下さび家に傳ひて。
是を捨るに忍ざれば。偕老の契りを結びて女子なぞ産しかれどもいふまでもなし。

汝ハそれや恩を忘れ愛を移して甚く辱るの證拠既に分明之信とその
罪犯を正すべけれども今吉めまでハ何の甲斐もなく汝が身よりて経穏
便に只今離別さするなれバ。おのが随意に出去べし。さて両個の女児が両個
あるれバかくろ留るんとハ思へども七歳未満の女の童姉妹あるこのハ父親の手
ひとつに守んハ便なき所為なれバ。小草ハそなたへ留め止以子をバ汝に属て離
別の妻に従しむべき他とていたりけれども。止以子のみとも出し遣さバと五ハ女四人かな
きるとて圓金三枚許を離別状の端に添へし。親子が夜四つ五ッ袱に包ミたるを妻
の傍より出しやりさる。良人の面色いと猛く眼を瞪らし臺を切り袴の間に常を衝き
て臂を張り肩を高くし疾視つける形勢に曙明ハ呆果て回答ハ得せざりち
瞻る眼中に涙を含み身ハおぼえねぞのとりそそてハ戯なるんとそぞめへおひ後ハ疑ひ。
淡くいへすべいといふ腹立て坐まるを何事とも辨ねど恩を忘れ愛を移ぬと。

宜ハ生るかこゝろ地ハ浮雲ハ流れ病ハ浮瘢多なれの末の女みとそ。なほ貳人ハ兄のの代。
何と不足ハ小夜衣つま戎かさ孫て下紐の関といまゝ緩きぐき。澄据あぐえ
せの人女房ハ日ゞ隨とりハゞ夫のあゝひでも浅きゑと水ハ書。文字なゝるくハ
孫のちゝ。ゑゝはもあゑ罪科を数ていりちく出んとハ。ところゐぐ行ゐきれば
妹伎の山ゐの尾上隔る生別とそれちゝひも長ゝ元ハ。まゞ東西もゝゝぬみを。
南と西へ「ゐとて。ゐくゆれゝや送ゝれよゝつゐどゝもゐひあゝせゐ失あゝば勧解
もせん又ま元花の色ハ愛で強てゐゝハを出ゝんとあゝば姫き色ハ絶て色。その仇人
と正妻に居てけゝハを子どもらゞ乳母ともあゝて朝夕ハ打火汲水炊もせん舊里
あハ只ひとりの家兄わゐとも七八年音耗せ孫ゞ今ゝゐハ越遊ハ紅ゞゝ。外
ゆハ歌る為もなき。縁由とゝりまゞゝ。ゑ法ゝくも捨ハ孫衝出されて止以
子ゐさゝ袖色とまんゝり。夫の刃ハ命と隈ー。死て出ゐゞゝるくハ世ゐなちゞゑ

歎ハせド。かくても出ひかくさゝゞハ砍り刺もしゐくと口説ハ泣ハ怒ゝ孫て。
良人の膝ゝ携ゝゝくと。戦ゝとゝるゝと腕廻て向ひく礙と突退ゝる父ゞ元ゝの
凄ゞさハ小草止以子も清共ハ一声高くハつと泣女児ゐハ目もかけゞ東六ハ
冷笑ひてさて孫ゝき老狐。むゝ夜毎ハ鞨の嫖客と如此泣て泣せーとて。
いゝゞゝハゝ成魅ー汐ん婦ゐハ七去の罪あり。又三不去あり。その第一ハ。ゞゐハ娶る
処ありて。後ハ捨ゝ処ゐ元ハ。ゐゝとゝ去ゞゞとハゝゝあゝゞゞ。元ハ庸常のゐゐハとそ。
汝ハその類ひゐゐゝゞ。大ある罪ゐゝゝゞゞゝ又ゝハ有あれば明々地ゝゝゝを
責ゞ。ゝゝゝゞハゐも処ゐくゝもハゝそゝハ離別せゞゝん。ゝ強てハゞ意ハ悔ハゞ。
東六をけゝとゝ七人ハ面を対ゞー。汝ハ狐をゝるゐゐゐゐねゞ。かくてもゐ在
らゞあゝゝんハゐく出てゐゝとなゝゞゞハゝまゞ小草を携て。直ゝゐゐの津と
立退べー。元成決て回答せよと云ゞく問ゝて曙明ハ千約の涙を袖ハ堰

ゑめ。ちゝ科はるけまども。良人死去て小草に別まて。家をやるとも伯
父せん。かく鬼こゝたん子とちゝ。賀茂河の瀬よ投て。ゝやく水屑とるゝ
あの浅助ら主の恩ちゝでおり人べ色世の仇ありけん。そもかくても恨いつ祖母。
両個の黄泉が絆とちゝて今更ふ死まゝ。身の悪業ゝを罪ゝつけまさく
と帯を締びそえ酸臭る長女の額髪をかゝ撫てゝ。ゆよ小草母父爺ふ叱
らまを止以子のゝとも遠き縣へ父を灼ふゆ行ふ大人ゝう留るゝ。ゝるよとゝべふ
草ゝちゝ点ゝ母さゝ父を灼られゝ。ゝいと懐かゝゝとゝすゝし。爺ゝよさのゝ叱らずふ。
母さゝを辛ゝて。ゝゝ止以子も共ゝ勧解ゆゝとゝゝ止以子ハ膝ゝ死ゝ。父ゝ財ひて
細小ゝゝを働て酸臭母さゝと諸共ふ物とゝふゆゝゝゝゝいと歎ゝく伯れ。
父ゝとゝてゝゆゝゝ母ゝ母さゝを許ゝゝひて爺ゝ姉さゝゝゝとゝゝ
ゝゝゝゝ須日買る裸人形爺さまふ進ゝせんゆゝゝゝゝと同胞ゝ。勧解を攻ゝ母

祝ハ胸も砕け腸も断ゝ可よゝと泣流石い推ゝゝゝゝ。親同胞ゝ一生の別
ゝとゝゝゝゝゝゝゝ勧解られてゝゝひゝゝゝ。爺ゝの面彩姉ゝ白ゝ祝つ歎ハ
せぬゆよ止以子幼稚とゝ。爺ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
外ゝて涼冷する。ゝゝゝゝ母ハふ親ゝ口さゝゝとて憎ゝゝゝゝゝゝゝ
せんいゝふせんとゝ泣沈ゝ。東六ゝ恩愛の涙い胸ゝゝ突かゝれゝゝゝゝゝゝ
絆ゝ臆ゝゝる先色ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
らゝゝく且ゝゝ物悪ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
怖恨ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
せ。三重の印鈴ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ日ゝゝ。失ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

面ともれぜば印籠とおいて共ふ名告紙せよ。さいひくを主人は優曇花の。光の扇絵も散らふ。又来る春ごとのまれぬ。長別離苦の世間と。豫てなりへどりうう紙きのふけふとう考ざじ。といひかけて又哽えり。分る二ツの印籠を小草止刀ま腰ふ著る。護身囊ふ納まバ両個の子どもの掌を拍て母さまよりの賜し参ら。もこまこ孤ふ人と。愛と反じてひけうえ。そをを教ぶとあるる人ゆるゆ世て失ひた。とのひ論も物いそね。父ハ怒まる声をあう。盃の喞言まぐあ。ぐやうく出よといそぐせバ曙明ハゆうくふ。ふ結へる袱衣左ふ止刀ま右ふ笠さ。ゆへハ定めるた十月中旬の同雲ふ。ゆり捨ぐた別まなり。妹のをそ出ゆ。母のあと追ふ長女ぐ。ハも共ふと立ちくまるを。さいせぬりのぞとう居る。父も実ハ冬の蜂。ちろ流石ふとろうつぷと泣ふ母祝ハ。ゆうくまとりやと。耳くえかるしろ鬼うを。ひろく小車の因果應報因弟紙一八が寃魂のかくふ史婦小寅縁て。東六郎を疑ハせ。妻を去ぐ子を捨ます。施ぬ別まも物の怪の。朋をちふ顕ハせ。こまぞ祟のちで免なるべ。

第三段

東海道ふ二兄棄妻を賺を
天龍河ふ十兵衛妹ま遭ふ

五十四塚東六郎ハ次女止刀子を属て。猛ふ曙明を離別まれど。人ア相潭までもなく。ちろひとろる物せーるべ。郷人郷黨も。従てこの條の事ハ。ちぶ月を経て後ふまを。郷りて。驚ぎて商議ーゆづ内室を追歯ぐ。五十四塚ねーて勧解るとも。その詮ちを。似ようとて。都ーく彼此とその往方を索ようけまど。既ふ程経ーるなんバ。貪いぐぐにてあり。ちぐ。やうし後ふ曙明。ちもひぐけあく良人ふ逐ま。止刀子を携りもぼ。ゆうなくも。安濃の津を出られども。投てやくべき處のあ。八幡山。府浪花

伴ふ六條の妓院ふあり。日紙を入せる嫖客あれふ孫ど。既ふ
六七年を経て。ことろを憑んハ面倒せるり。やや途いと遥なりとも。
故々の見ふ身をゝせるべともかくゆしてゆひるんさふび戦慄へ赴んとて。
やゝく弓ひ決ゝんども。年来京洛ふありつる行人。籠のるふひとゝくて。
花街の外へよくゆゝんど。浮世ハらしゝや南文字の。紛ふ七年ゝ経てしゝど。
ある人ふあひりやせんと新護さふ遠くハ出ど入うゆく俄頃ふ放まそ方
里の逆旅ふ赴けば。野を過山を越の州。つゞ舊里ハいづ且の方に當れりとも
辨ど。人ふ問ども遥まて。何の相彈んゆ女見ハ稚。ひとりゆくとも憂旅よ。
或ゝ止ゆる秋背ふ眉ひ。又賺つゝ秋引て。是貢ふ関り。彼貢よ憇ひる
艱苦よあふゝよりり。若狭路を望てゝそ。北國へ入るりゝゆゝ長浜く
いゆれて伝流ゝり。戦後へ赴くゝゝ笑ゆゝ。ゆゝ長浜どゝゝ。てその次の日柴屋の

津まで帰ゝり。この処海上七里を渡さんば張度へあれども。東海道
水路の難義ハ云てゝと冒く。出船候ゆ人ふ罵散動むふど曙明ゝ。
ゝゝゝ安ゝ成。船ふ乗て可ゝんや。乗ざるが可なんや。つゞゆく方を
問ども決ゝ待つゆ待ゝよ。茶店ふ尻をかけゝる扨。ゝゝゆ船出をまゝ
ふゆゝん。曙明がむゝひの赤ふ。憇ひる両個の行人あり。ゝゝれば二個ハ
年の齢五十ばゝりの老女ゝり。又一個ハ年紀廿ばゝりの男子ゝり。この
壮佼が老女を呼ゝ。姨と云ふ面影ゆ。似る所あれば姨姪ゝゝ。件ゝ
老女ハ小妻木綿を湿潤よ染る布子の裾るく端折ゝて腰ふハ
ゝ安ゝる紙包を拵ゝ見ゆ。ゝゝ一條の竹杖をゝる。又壮佼ゝ。ゝ
木綿を標緯ふ浸て紋のゝゝ。向くゝ見ゝる布子ふ。袴の両衣を上ゝ。
向袴の脚絆垢染て黄黑ゝふなゝゝるゝて。紙包を脇ゝ負ゝゝゝ。ゝて

彼老女己前より曙明が白黒とはいひしが黒き眼を顕して瞋然と打笑ひ婦人ハ幼弱き令愛を携て何地まで旅立し玉ふぞ。て従者どもハ倶しあらぬ。不知案内の舟合舟中ハ船霊の初穂。難儀もあるものぞよ。麁草。吾儕とても共に渡しわたし。より汀ひ進ませんといふ人の話も旅にてハあれとむかしの人の言の葉も今さらおもひあはするものから正首ある事も心後させ。曙明ハ會釋して。いま同行も待たれど彼ハ故ありて後と待り今よや来べきところと。実るに正め回答せるを。杜役咲てうち笑ひそれと不便のありし倶この出船に乗後れて明日も明後日も風まちしてくれ。一歩も前路へすゝむことかなふまじ。抑婦人ハ何郷より何方へとて赴き玉ふ。おなじくハこの海上まんや渡して。熱田まで渡り一人を供まひ給ふと勧るにぞ。曙明咲てよろこびつ。行程あまたつゞる旅なれバ。湯懸る伴侶あるハ殃危を脱れがたけん。

杜役ハ同行ありし。それて望しからぬとも老女の伴侶たるべきより。冀ふ所之まづ彼等を桐謬てけふの出船に乗らぬずや。とおもひながら息急て老女に對ひて同今彼人よりてまでけふの出船を遣るさんハ便宜に待らぬ。わらハも安濃の津より。この津の東へ赴くものぞ。彼は前面へ渡せべし。郷里る人援けり。其処まで後れて伴侶を待すん。あらバあれど。いまはる程で一ト足もちの船よりありたることを恥じ。足なと人なき舟に出まして七ありし。とのハ老女ハ咲をあへぞ。それいと易きことよ。ろづるのう。うち拝しまひ孫とりに角ぞんや船のきおくとて。人喋しく罵るにぞ。曙明ハ止双子をおそ彼老女のもとにも忙しく茶店を出て。杜役に挨されつ。獲て船にぞ乗たりける。かくて老女ハ正首に。曙明母子を慰めつ。諂て准嫉しん。折く果子餅などを行嚢の中よりとり出て止双子にあたへなどするにぞ。物を獲て殊更に嬉ぶハ小児の生平で。止双子ハ老女と杜役を。

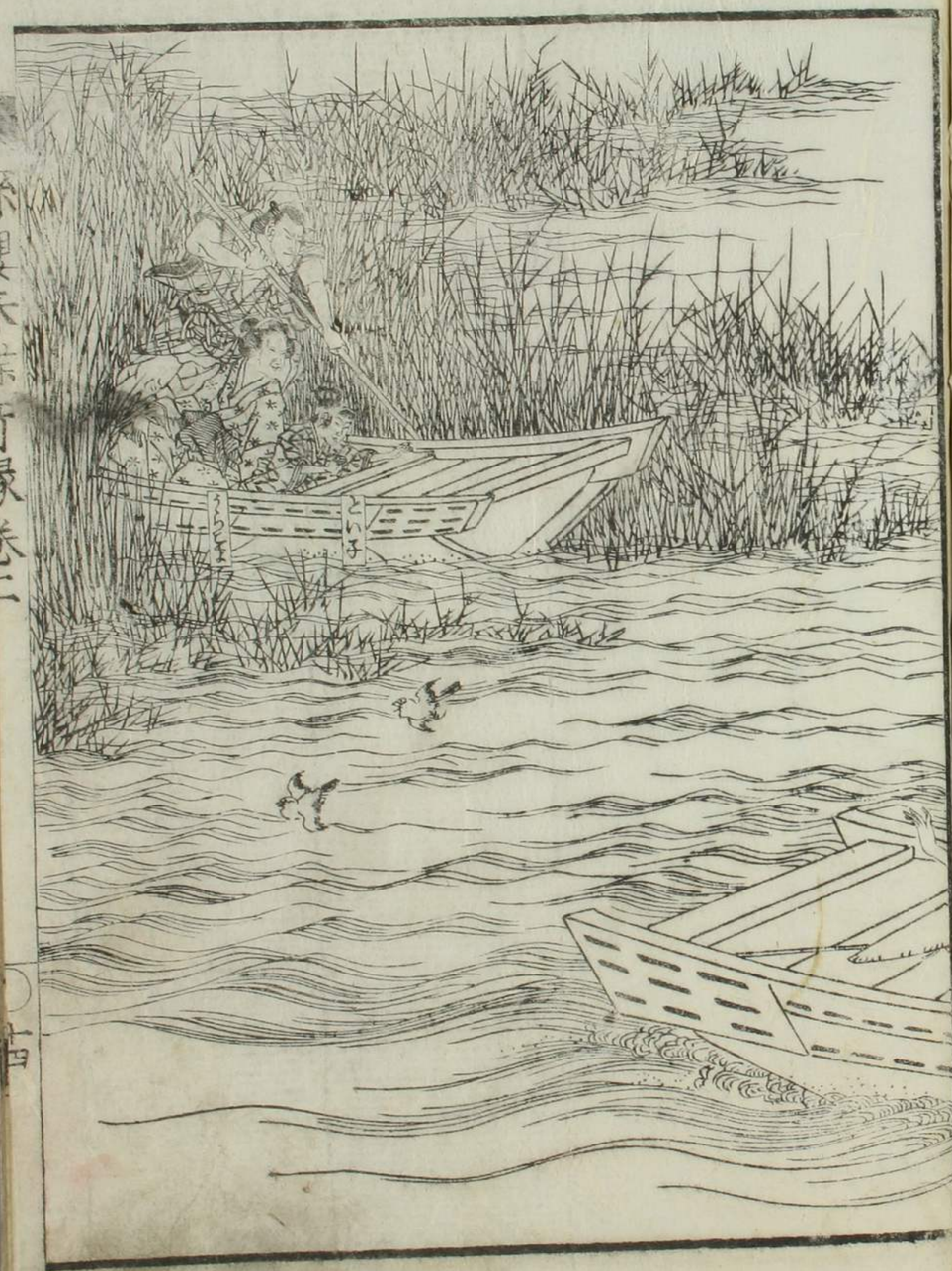
喜しき人にもあひつ。忽地押て厭ふところし。この従に慰めまそ曙明ハ終日の
水狩を事とせしを忘れさりさる程に。船ハその日の下晡に熱田の浦に着しかバ。
人食ハあのがちひくに。船を乗捨てもく程に曙明ハ彼老女に道導れ。夜寒。
星崎松風の里をきくうちすそ呼続の濱辺つたひに捕捷間に宿扱ぬ。その
夜老女ハ真くらちそ曙明に對ひていふやう。御身と同行もまいせしに渡れたるは
宣ひしがつくくあん身の形勢を見て。倅の趣を推量るに。そハまつたく偽りなそ。
身の形あの随ふ稚さを。およそ只ひとり旅をなしたまふや。あんじまん釼花挫
山のおくの婦幼とある老ハ人侮りて動もすれバ猥がハしきことなるに。
左をみても右をみても。あしらね旅宿に處てと准役をなきハあふれいと危き
ことなるまでや。わたくしも役も伴侶にあるて。おなじ宿りにおりしと一樹の蔭一河の
流をくむも他生の縁なれバ。いと痛しく思ひ侍り。往方もおなじ道なるべし。其処

まで送り進らせまし。わらハ亦あつく告まへと彼杜役あろともふ。いと叮嚀に
聞しかバ曙明ハ今更に蓮果べきのがらへすらねをかくまで不憑しく。吏男人を
疑ハ望りりして又雅が慰るあのくあるべき向地まちあらじして頼ぞやとおもひ
あらバまづ浅からぬ好意をよろこび。吏えんさそいふやう。室に推量せらるく如く。
わらハ近属良人に別れ。幼弱き女児をわそ。越の蒲原へ赴くあのなし。
京洛よ人とありしかバ。舊里なのがるふ物おもひ。越路へ帰る方をまよび。このごろを
のミいとわびうち。胸苦しく思ひ侍り。とかく老女ハ小膝を摘で。呵くとうち
笑ひ。さあらん事ハおぼつかなけれど。如此くと告あハねそれ幸なることぞ
や。吾儕もえ本越後のものなる。良人ハ最某に身まかりぬれど。一子ハたんや
三十を越てあん身が今弱年も年もまなしる孫さへ二三人あり。老て家ふのふ
されバ。新婦虐すと人々いふなれど。よて猛ましうちそ怪ある杜役一人を

ねて伊勢太郎へまゐりつゝ賽の河に合船。不思議にもおん身とおもひて。今
又吹く同郷の人にこそあれこゝろ安くおもひ又軽尻馬の後方へも立
せんと急ぎつゝ蒲原まで伴ひ進みけるへばかりへば壮夜も老実ぶちて蒲原
なるべし新浜さらでは塩屋も赤塚鉄鳥屋の干潟に潮や満けん。浅
からぬ値遇なりと打合槌の薬礎吹由るまで小甲夜を更て旅宿へいそぎ
寒けれど曙明はおもひもかけず。この老女旧里の人なりと吹かし瀬に
よる亀の浮木に遇ひ雪の鴻るる格子の月影に向ふ死して旅ぶ工限り
なし。これよりして彼老女は正首にかゝる。されどもまたいやよろしく縁なりとて
婦人の身とりて壮夜は摩ねなりのぞとて侶するさとこぶ卧華を次の向へ乗せし。
又朝まだきに草鞋うち来げそねづき曙明にこそ孜穿し次の日より
止双子もまた壮夜と老女とかゝるく背に肩てさまくにかゝり慰め或は冬

野に枯残る草の花を摘てそなへ。又あるときは果子餅などよそひ。程に
与へければ止双子はいよいよ老女に狎て束の間も離れず。曙明はこの形勢にこゝろ
いよいよ安堵つ一日二日と日を経て程なく尾張三河をも越て第三日には遠江
なる天龍河のほとりまで来りしに。この比は河の瀬も今にましていと廣く。
両岸には蘆荻高く生繁りて水より面は絶てみえず。冬の日影の
短くて町屋村なる比下晡にかゝりしかば。当下壮夜は姨に對ひて天龍河は
甲なるこの船を出さずと吹るに目は木や雨に頒さね。吾儕まづ河原に
出ていと難くてこんすやとしへば老女はこは吹由あれど。そは肝要のことにこそ
そくとゝいそがせば壮夜は足に信して河原を投て走るほどに。さつて候ひしに
こなたに待ば曙明は徐々に四五町後れてゆく程に河原のこなたまでとゞろ
おぼろげに両個の荒男さし對ひて流木の乾たるを焚よせて火を焼てあり。

堀路の十兵衛
悪根を懲す
大天龍寺
母子
勾引
さる
あけぶの
ろう平


とい子

曙明を向黒んで指一耳落るごとくなれば足を早ふ過ろう。猶ては不オ
赴けば。壮佐いこるるふ病てゆを抗て拒くふぞ。老女ハ遠ざこ耳ざるんで。原来
いまぞ遅ろうだ。そく運ぶあくとて。脊負る止孤子を揺揚曙明をいそぐ
ちて舟一汀清よりあ出てうん耳ざ舟二艘よせてあり。急その友をちぐれば。
左ゆるる私へりろ共よ。ゆをくふんとしろ。津人推禁め。須臾ハ瀬が
ちゆ四五人ひとろふ寄るくとたい中流ゆ中てろ。鼈よ掉をるふいと術
なーの。過失るとたハ後悔をこよ達ぐくだ。ろうてこの私へ二人ふ。二人ハ
りれて左ゆの私へ。ちゆ。ふゆ。とりふ。曙明ハこのる私佐なくハろふおろりろ
共よ出てもろ共よりてきだ固辞べるもあるだ。吾倚ハこをふ寄ふんと。老女ぐ
脊ふ負ふる。止孤子をうん有くつ。ふせんとをるふ稚子の癖るんハ老女の
肩ふとり乗て。賺せども雑ぎで。婆くさゆと諸共なるだハ舟ふ乗ーとく。

むづるふをだ。老女ゆ又この形劣ふ強て止孤子をろうんとゆせぞ。吾倚
獲て伝るゆハ過失さをるとハ。ふ。この津ハ志ぐーぐ行くもん乗ーゆ
住の男とりふ。その私ふ乗ゆ。五倚ハ彼紙の舟ふ乗ゆ。さろとて止孤
子を負くる侭。左ゆの私ふ乗ーく。曙明ハ已に紙ゆ。壮佐ふ扶られて。
左ゆる私ふ乗ゆる紙ん。津人ハ掉を放て。おのく私を出を後ふ。曙明ゆ乗ふ
さるハんや。前面へ乗んとまれども。老女と止孤子ゆ乗る私ハ。中流ゆ
到ふ。推流さる如くうえて。下流十町ばかりあるて。蘆荻の中へ漕戻て。忽ち
乗えんとるりしゆ。曙明大ゆ驚ゆて。おれハうふ。向間ふこるるこの私ハ。各へ乗。
この紙ふ壮佐ハ。ゆめて後方をうんとりて。ゆ。姨の乗さる私の跡ゆ。驚て。
矢をふ津人をりとうんてその故を罵り。向ふ津人ゆ些も驚ぞ。須臾の瀬の中
をふ。ゆろく私を取廻せば。流さるく工必定るゆ。ろうんども後るハ。蘆荻ふ

携りて出しぬ乗る人に憑みし岸本の所りて待まゝ彼も漸くび漕出しゆく。
ものゝ寄てせんあれんとふよを呼ても曙明ハいかなく心安らぬ日ハ暮るゝに
何時まで待てかくて却をとふべきども少く申して速よ吾が子の安否をきかして
さぞと添とおかる見ら白貌ハ壮佼ハ蹉跎して津人をいて罵り後する舩の
流さる彼は汝ハ只ち事なぬ身にして苦ぎりしハこゝろ得るぞとて此舩を彼処へ
やとせりへさぞやと思ひなすけば津人ハ弗々と呟ちつ再び棹を取るに適して走る
舩を漕出せバ曙明ハ彼舩のこなたに見物来つゝうちとめ見えるりひかく冬枯れて
指くハ岸のよしあしと身のよしあしよふかとされて早瀬の水も恨しく袖絞りつゝ
又舊の汀渚よ舩を下らせしるバ壮佼ハさまゞく曙明を慰て総て舩より扶
のぼし二三町西のかたへ誘引つゝ小う先てる舩を索んよ我身を倚ひくゝも
奉るも立か〳〵ふらよ任せバ要時この処をさせよ吾儕ハ河原を下流へ

令弱の往方を索てよりやおかくとも赴きども暮果ぬ間よ帰り来らんある
学べつく程とおひかけて更よ蹤を回て下流へ走まさバ曙明ハ只ひとり道次に
年を経し冬青の下よ立在て吾が子の往方をひとり瞻る空もかき曇りて行人
稀なる冬の日の河風寒く吹あれて立や黄昏にもなりたれこそよれと西
個の癖者冬青の背に立かくれ遙よ耳語居ゐたる是則別人ならぞ。
嚮に曙明がこの処を過りしとき道次に火を焼つゝありけに二ヶ至を目送り
耳語るものどもよ、そのとき件の癖者ハつかくと出て左右より曙明を
引夾て顔をつゞくさし覗きて呵くとうち笑ひ此二杪枯になりにけれどまだ
花ハ白ひらせずと美濃の野上の沈田へ賣らバよき正月をさせべきものとさゞ
来ませと手を取らバ拂ひもあへず曙明ハ吐嗟と叫びて逃んとするを取りも
るさバ擾廻て背より抱留まバ一個の癖者面に立て足をそくひてかゝれバ

揚叫べど喚どかとも些ざと傀偉よしどさりめえて長田のかさへ投てゆくなり。夕戦て来る旅客が。天龍河をさしさんとて。外用もえせざと河原を投さく。歩の運びをいそがせバ。癖者ホハおのれざも。彼旅客を突あたりて。曙明はうち落し。齊一撲地と輾轉バ。旅客も六七歩。傍僮ながら驚き怒り。足踏駐め佶とさんで。こ大膽太き壁虎ごとくりより網を張て。項のめぐりの細ありと然も志ぐ何きるぞと罵るをバ。耳にもかけざおちよくて叫び息されてよれるがでて。疲まてする曙明を。遠しく揺き揚んと志さりしが。旅客ご主をなるに至るはざ。至り蒐て前に立さる。癖者が膈を楚と把てひよりされバ両個の癖者大に怒て。又曙明をかえおろし。左右より拳を揚て旅客を打んとする。旅客へとよし左へ外し。ふりかえて撻と投組んとするを丁と蹴倒し。又その著を敲き伏せ。足に携るを蹂躙に。牽車に

おそれて癖者ホハ。かのかへしもやらひけん。曙明をうち捨て。背ならも見かえて逃失より。曙明ハ不慮人のまそけに将棋の継乃。列卒を脱まーうちして。旅客をやー辞え。何処の人なきかと待まど累に難義を救せおふを。ワしんが為の守本尊。産神にこそまへされと。ふべ旅客ハ莞尓と笑み。剣法一手志らね身も。舊里にありしと。門田に水を漑るとて。足手に力を入まてするかひに。小肉撲さへ少しおぼえし。闇思君が益にたちて。りまんながらなるすることで。働をまてそのね。さてもおん身ハ悪棍どもれ。勾引されおひりん。去らちもその人とはみんえんご。同行ハひいのざや。といひつ。顔をさんかうりと。あれ頭をア様なれ。そなとえ最寡に加茂河へ投しと聞えさる。妹旦関よおよびや。といへバ又曙明も。旅客を熟視て。我もおん身ハ舊里なる。りんがえ公

十兵衛さゑ盛さもつゐぬさそぐれ時。てあて環金とゝ。あるひろけ
ゐべ矛の憂ふ。何々。までも。ゐくざろし。面目なし。と伏流め。十兵衛
ひよ。疑ひ解ぎ。七年茶の秋九月。六條の妓院ろ。ぢん矛が係員の
袿ゐりとく。叮嚀ふ賜り来され。ろが。実よ死せりと。ありひとりて。
過七の布絶併事。ぞ。ろりに善捲を吊し。乾ぬ袖ふ露乃令。
恙ゐくてけゝこて。環會ふ。故こそあるめ。京洛のかゝいその道も。
遠つ淚海の天龍河。とゝんるハ冥土の三途河。欲ゐれさ死出の旅人ふ。
なりにるゝとゝふのゝ。ぞづ。ゐんぢ矛ぐゝを問ん欲。ゐぐゝを苦べき
狄。同絶とゝふて多くもあらび。妹ひとり。見ひとり。死ゐる妹が生てあゝ。
飲びゐ且不佑ハゐさん。双千世の中ぐすまひハ。膠て固ゐることもなく。
吾倚も今ハ越後よ處ぐ。ぢん矛が入水ゐゝり。と。ぞゝ。比きゐれも又。

疾積ふ病體ひて。京洛へ赴くゐるのゐみ。一年あまりの茶餌之味。
痩田もゐゝ賣尽ゝ。金のゝゐゝ留ゐれど。人参飲て首縊。と喩ゐれね
命凶。貧の病を療ゐぐ。医師ハ絶てゐ死世ゝ。主ゐりて挽んゐの紙。と
ゐひ決て次の年。ある人の狙父ふまり。武蔵の豊島へ赴きて。練糸の
向丸の小厨となりて竟ま又。四年ゐ来廓を與り。君紙ありハ矛ゐゝ。
律糸一扇ゐ得となりて。彼ハ爲ふゐるのゐく。この春ゐ。母屋の倚ふ
別宅さもゐれ。海月よ廓へゐりひ俳沢ゐ。狙方の蔭ぞゐ。雲ゐ縁ゐ
いひゐぐら。吾倚ゐゐて殊ふ不ゐ濃とゐふゐゐそあれ。吾倚が狙
方十ゝ紙夜ハ。先主人の矛ゐふて。雉ゐ侄子を守育後ゐんをせゐゐぐ。
扨く人の風声ふゆけべ。先主人一ハどのハ。組糸織物買入ゐふ。年ゐ
京のぼりゐゐふ。狙ゐ六條の妓安ゐ。馴深て。女房阿或どの紙離別。狙れ

ひとたび中ありけん天文元年九月十七日の夜伴の抱女の孫とおぼ。
賀茂川へ投げ打。一子なる綱五郎どのハ僅よ年七才なり。主人乃母
十十餘どの。後見をしてやうやくふ豊鳴なる糸庫紙。とり留られけるとぞ。
時月ハ口ぶ妹の入水のその夜と一点さうがどさそハ現在の主人の兄公そ。
ぶ妹ふ惑溺ーて。のろ共よ死ひ一緒と云ふど人ふ告られど。主イ
ちぐるくよりもなりまとひとり傷痛をのこ。ちう新よ今茲九月ハ生の
主人一八どの。七回忌よ當るなり。被人ハ有ありて家ふて身まりうひ。
和殿宗治よ赴ちて。ちうぐさ蘭若ふて。追善の仏事を修行ー墓表
をも立よと叮嚀ふ親方十ー餘どの命ちるまりく。八月の下浣武蔵を
起行。九月の盡アまで二條の旅店ふ逗留ーて一八ぬ一のるハさらなり。
ちん身ぶ為ふ日経を読ー。石を彫墓を修理。十月の中浣ふ京洛を出く

高野へ登ふー。大和をめぐり。伊勢へ詣てさら後る。途よおん身ぶ危
難を救ひて。ちくちぐる射面ハ。今ぶ母義のこちらと。緯ちもなく
物くられば。曙明ハ生どふ只面るーて。ちもるせど。且て汝を撞ふふで
存命ぶ。ちぐ。ちるこ死。さそ辨ーく。ぶ母ちべ。一夜ちまりの麓水ぶ。ちさぬ
水ハひとふふて。無言ひふ背ち情るく身を脱ちてその人ちのこ投ちり
とるとひのひそ。面様ちこの車ふちり。口ぶ身ひとハ由ちるる。伊勢ふれ
旅人ち助られ。ちりなく家ふ伴ち死後ちそハちとぶふて。故郷へ信ぜん
るも。新護ちて然止つ。竟そのそれなりふその人ちそふて両個の女児を奉。
憂ぶ年月を送るひるく。仇一夫ち飽ちて。科なれの鬼ーく。
次女なる止孫子を属て逐出されて後るべち。家ーなけ身十す漬身ぶ
曇る涙の雨降る里ちのこ。其処とも志ぶ呻吟ー。ゆ行くく

出目次

絹糸
織りれば
品々
ぬりいと向九

村長
十兵衛

来名ある。津まで五へざども。老女壮佞両個の行人伴勢へ預て越の州へ。
帰るといふは伴主一日二日と来る程よ彼処の大河をつゝとゝ元。女児ん
止松子を失ひつゝ〳〵とゝふ捐られてゆくでせんさべる元ゆゝふ悪棍等が
いで来りて矢庭よりつゝを引拘掻攫ひて去んとゝるゆゝふ家人が
抜ひ出ひてつゞ身ひとつのよまでゞあれどゝと情〳〵へ止松子なり。年も僅ふ
六なれべちゞ東西も考へ母子ゞ人よ棄られ母よ別主て今胥へいふあゝ
らん失主さる辟の類如此くなり。と一五二十を涙とゝりふ苦〳〵べ十兵衛
咲てうち驚元。その老女壮佞も世よいふ虎落護摩の灰なるゞまぢ
る悪棍ならん我ゝ〳〵ゞ我後へ帰るものゞ伴勢ゝとまで来べ元よあらゞ。
日ハ既や暮て胥闇なるゝとゝふ〳〵ゞ長食後せべいてゞゝふ更闇なん村長
辞赴きて。今夜最〳〵穿鑿さも彼悪棍一両人を速よ拘るべ姪ゞ徒ゞも

考るべきさん。誘ゆ〳〵といそゞして。曙明を待門つ。河原よ属る村長ゞ
宿所よ赴き。縁由を告るけ元べ。村長ゞてうち驚元。都鄙とゝ〳〵彼此
とゝ〳〵。年来合戦止と元るけ元バ公支よあゞ〳〵て天龍のつて舟へ申を
限て出ゝるなり。辟の類を考ふ時刻大形よ後主てゝ。そへ真乃
津人ゆへあゞゝゞ速よ穿鑿さべゝと為つゞ。曙明ふ悪棍ホゝ骨相
摸様を問定め。俄頃よ津人ホを呼集合て。清息を孔明元。その夜乃
中ホ八方へ部〳〵て彼悪棍ホを索る行よ結旦荘宅ゞふ。津人ゆゝとも。
息杖津久八鶴骨出月丈。痩鞍雲珠三といふ悪棍三人を搦捕て村長
辞ゝて来れ。そのとき村長ハ曙明ふ彼ホを入ゝる。雲珠三津久八と
喚做ゆへ河ホのこゝる冬青の下ホ曙明ゞ立在ゝる元矢庭よ引攫ん
ゝて十兵衛ふ教ゆ悩ゝ迎失ゝるゆのどもゝ。又出月丈と喚做ゝ元。曙明

と壮佼を私に委て天龍を渡せしものに紛れなけれバ。村長ハ件の悪提
らを秘に召て其党の往方止水子が存亡を鞫問するに。悪提ら陳
じていふやう。某等ハ假初にもそのまれなる野ぶせりで件の彼徊の張本なら。
彼老女と壮佼なれども。彼等ハえ知ぬ者なる人なれバ名を何と喚やしらん。
住所も絶て知るよしなし。又老女と稚子を率て私を隠しゝものゝ近
ころ桐摸より来れる。小馬栗といふものにて件の老女壮佼と謀てあひ
識るものなり。某等三人昨日小馬栗もろ共に寒を凌ん為路にて火を
焼て居たる折。件の壮佼走り来て小馬栗にいふやう。曩に棄置の津より
箇様々の品物を携ひ来れり。汝等津人に打捨て如此にふせよりけれ又
きんすを欺きて奴らびこるの三件ふべし。汝達四人が中。二人ハ残りとゞまりて
件のきんるを引攫ひ。富田林へ立入れよ。口ハ又背より彼郷へいかんと。

よしく直段を定めなん。些摘枯の花なれど。賣バ二三十金の物になり。
又小女児なんハ婦を附ておくべけれバむやせし。きハまよりの案内に
疎けれバ小馬栗ハ婦にとたまけて早く亡よとひつるが。今后ハ彼壮佼と小
馬栗あまあかざれバ往方を知べけとり。然らバ彼小馬栗を捕よとて又彼此を
渉猟とも。彼が所在ハしらざ。老女壮佼ありハ止水子をわそ化託去けん実をしる
よし絶てなけれバ村長獨く絆の趣を遠江の前司保弘ぬしへ訴て出月み雲
珠三津久八を進らせられバ再て鞫問せらるに積悪脱るに所なくて彼悪
提ら三人ハ竟に首を刎られけり。されども十兵衛にハこの件のゆふよりて一旬あ
まり逗留し絆の顛末を知るのまなんだ。些ハ怨を報ふといへども。止水子が往方を
しれざれバ曙明ハさらにかく。涙の乾く隙もなし。十兵衛太かたれを諫て濁る
物ハ先へなきもの。別て後ハかなしめり。譬バ口をれとなん身の如し。口れハなん身をと紀せりと

忘ひ。ちゑ分ける迄を舊里ふ。あるとのこゝをひ。越路を投て東へ赴きこゝふ。環金こゝふ。人の智とゐく豫てより。量らんとすとも測ゐんや。親子の因縁得ざりせば必あふ附もあるべき。迄幸にこの春より。母屋の傍ふ別宅をこゝまで直ふ武義へ使ふべーヨゞ親方十十位ぞの年来多病ゐる絞りて女房といふものなく。鄙ふ住まふ小厮のみ。鰥ぞじハ古衣の解洗ひふ任ゐる況りのみ。ちゑ分まりく母屋へいるをこゝまでの費をなさけあべ。一八ぬ不後迄ゐる。罪障を贖ふまもぶこれふまをぶ花落ふあし月のごとぐ人ふあらまべ〳〵ば。曙明といふんも憚あまべ。呂舊名の旦閑とゐんさのみる歎ひぬひ。ゼと叮嚀ふ説諭せば曙明ハ今文ふ兄が縁ふ繋れて死を待ゐる彼嫖客の。豊後の家ふ赴くこゝ。ゐゐこゝ迄脱れぬ因果にてそと必べ固辞ゐる推辞ゐぞ。十吾閑ふ誘引迄。武義を投て赴く行ふ日を待て豊後の芝傍へぞ著ふけれ。

絲櫻春蝶奇縁巻之二　終